若様の死

野村胡堂

一

「親分、ぜひ逢いたいという人があるんだが――」

初冬の日向を追いながら、退屈しのぎの粉煙草を燻している銭形平次の鼻の先に、ガラッ八の八五郎は、神妙らしく膝っ小僧を揃えるのでした。

「逢ってやりゃ宜いじゃねえか、遠慮することはあるめえ、――相手は新造か年増か、それとも婆さんか」

「あっしじゃありませんよ。銭形の親分に逢いたいんだそうで、染井からわざわざ神田まで、馬に喰わせるほど握り飯を背負って来ましたよ」

八五郎は自分の肩越しに、拇指で入口の方を指しました。

「堅い方だな、よくよくの事があって遠方から来なすったんだろう。洗足盥は洗濯物で一杯だ、すまねえが井戸端へ案内して、足を洗ったらここへ通すが宜い」

平次がそう言うのも待たず、

「恐れ入りますが親分さん、私はここで御免を蒙ります――明るいうちに帰らないと、婆アが心配をいたしますので。へ、へ、へ」

妙な苦笑いといっしょに、渋紙張にしたような五十恰好の老爺が一人、木戸を押し開けて、縁側の方へ顔を出しました。

「そこでも構わないが、陽が当って少し眩しかろう」

「へエ、天道様に照らし付けられるのは、馴れておりますので」

「なるほど、そう言えば狭い家の中よりは、埃っぽい江戸の街中

でも、外の方が気持がよかろう、――ところで、あっしに用事というのは何だえ、爺さん」

平次は煙草盆と座布団を持って、気軽に縁側へ出て行きました。

「染井のお百姓で、仁兵衛さんというんだそうですよ。知合から知合を辿って、向柳原の叔母さんのところへ来て、――お前さんに伝手があるちゅう話を聞いて来たが、銭形の親分さんに逢わせて貰れえ度え、お礼はなんぼでもするだから――と背負って来たのは一と抱えほどの化けそうな人参と牛蒡――」

八五郎はツイ手真似になるのでした。

「お前は引込んで居ろ、馬鹿野郎。そんなに思い詰めて来なすったんだ、冷かしたり何んかすると承知しないぞ」

「ヘエ」

「爺さん、気にしないで下さいよ。この野郎は賢こそうな口をきいているが、心が少しばかり足りないんだから――」

「そうかね、見たところはそれほどでもないが、気の毒なこったね」

「ヘエッ、悔みまで言われちゃ世話アねえ」

八五郎はプイと横の方を向きました。

「さて、爺さん、私に用事というのは？」

「有難うございます。そう御親切にして頂くと私も染井くんだりから来た甲斐があります。実は親分さん、私の伜の文三の行方を突き留めて頂きたいのでございますが――」

「その文三さんとやらは、年は幾つで、何時、何処へ行きなすったのだ」

「一年前、巣鴨庚申塚の赤塚三右衛門様のところへ、奉公に参り

ましたが――」
「武家奉公だな」
「武家と申しても、赤塚様は豪士で、公方様からも格別の御会釈のある家柄でございますが、江戸開府前からの土着で、別に何処からも扶持を貰って居るわけではございません」
「そこへ下男奉公にでも出したというのか」
「伜の文三はそのとき十九、百姓の子のくせに華奢な育ちで、武家奉公の出来る柄ではございませんが、赤塚様ではたいそうなお気に入りで、若様の数馬様のお相手にするから、たってと申します。私どものような百姓の子に、学問武芸も仕込み、行く行くは用人に取立てるからというお話でございました」
「？」
「で、それにお手当が大変でございました。一本立の武家奉公でも、当節は年四両の給金は上の部でございますが、赤塚様では年に十両の給金を出した上、支度金が三十両」
「それはまた大層な気張りようだな」
その頃三十金と言えば、安御家人の収入で、大家の嫁入支度でも、それほど掛けると人の目を引きます。
「私も年貢や借金やらが嵩んで、さんざん苦しんだ時でもあり、たった一人の伜ですが、ツイ奉公に出す気になりました。どうせ家へ置いたところで、百姓仕事の出来る伜でもございません。私どもの子にしてはとんだ変り種で、江戸の何んとかいうお役者衆に似ているとやら、村中の娘たちに大騒ぎをされている好い男でございます」
「それは又」

平次も挨拶に困りました。八五郎は鼻の下を長くして、眼をパチパチさせながら、面白そうに聴いております。

「その伜が、去年の秋奉公に上がったきり、一年あまりになりますが、一度も家へ帰してもらえないのでございます。町家の小僧奉公でも、年に二度の藪入(やぶいり)がございます。それが親許へ帰してくれないばかりでなく、此方から逢いに行っても、何んとかかんとか言って、どうしても逢わして下さいません」

「誰がそんな事を指図するのだ」

「御用人の久賀弥門(くがやもん)様のお取はからいでございます。尤(もっと)も御主人の赤塚三右衛門様は、もう七十近いお年寄で、その上中風の気味で休んだきりだと伺っております」

「で、その文三とやら、お前さんの息子さんから手紙くらいは来るだろう」

「ヘエ、折々手紙は参ります。たしかに伜の筆跡(て)で——檀那(だんな)寺の和尚様にも褒められましたが、伜は字もよく書きます、ここへ一本持って参りましたが——」

百姓仁兵衛が縁側の上にひろげたのは、半切一枚に書いた至って簡単な手紙で、親が自慢するだけ筆跡もよく書いてありますが、文句は通り一ぺんの時候見舞と、私のことは心配してくれるな、主人は親切で、何んの不自由もない——というだけ、そう思って見ると誠に味も素気もない、空々(そらぞら)しい文句です。

「人に見張られながら書いたような文句だな、——ほかに気の付いた事はないのかな」

「折々手紙に添えて金を送って参りましたが、五両三両の小遣(こづかい)より、私と婆さんの心持にしては、たった一ぺんでも宜いから、伜

の顔を見度い心持で一ぱいでございます。この秋になってからは、婆さんが夢見が悪いと申しまして、うるさく伜の事を申しますので、三四度つづけ様に赤塚様へ参りますと、用事があって大阪へやったが、用事は混み入っているから帰りの程もわからないという、木で鼻の御挨拶でございます。大阪はどこに居るのかと訊ねましたが、それは教えてくれません」

「フム」

平次も腕を拱(こまぬ)いてしまいました。何んか仔細(しさい)がありそうですが、それだけではどう手の付けようもありません。

「それだけなら、私も心配はいたしませんが、大阪へ行っているという伜の姿を、私はこの眼で、確かに見たのでございます」

「それは何時のことだ、場所は？」

「三日前でございました。伜は大阪へ行っていると言われて、庚(こう)申塚(しんづか)の赤塚様から、がっかりして帰りかけた時でございました。門を出ようとして、何心なくフト振り返ると、お庭の植込の間から紛(まぎ)れもない伜文三の顔が、なつかしそうに私の方を見ているではございませんか、ハッとして駆け戻ろうとすると、私の眼の前に立ち塞(ふさ)がったのは、御用人の久賀弥門様でございました。――伜があすこに居るじゃございませんか、一と眼逢わして下さい――と申しますと、――とんでもない、あれは当お屋敷の若様で数馬様と仰しゃる方だ、其方(そのほう)の伜文三とよく似てはいらっしゃるが、若様は人品骨柄が違い、それに左の頬に目につくほどの黒子(ほくろ)がある。お前の伜と間違えるなどはとんでもないことだ――といやもう散々のお叱りでございました」

「――」

「でも、私にはあれがどうしても伜の文三と思えてなりません。一応は若様にお目にかかりたいと強(た)って申上げましたが、剣もほろろの御挨拶で、がっかりして戻って来ると、その翌る日は御屋敷からの手当として、思いも寄らぬお金が十両届きました。盆でも暮でもないのに、それも疑えば変でないことでもございません。いろいろ考え抜いた末、知合の者が八五郎親分の叔母さんに手蔓(てづる)があると申しますので、思いきってお願いに参りました。私はこの目で三日前に見かけた伜に何んの変りもある筈はございませんが、あのままにして置くと、どんな事になるか心配でなりません。親分さんのお力で、伜を取戻して頂くなり、それが出来なければ、せめて伜の安否(あんぴ)も知り、逢った上でこの先武家奉公するものか、得心づくで事を決め度いと存じます。何うしたものでございましょう親分さん」

仁兵衛老爺は縁側に手をついて、折入った様子で頼み込むのでした。

「成程そいつは心配だろうが、旗本でも大名でもないと言っても、赤塚様は江戸の名家だ。町方の御用聞が、いきなり踏込んで調べるわけにも行くまい。もう少し様子を見ることにしては何うだ」

「ヘエ」

「その代り、少し心の足りない野郎だが、しばらくの間、八五郎に赤塚の屋敷を見張らせることにしては何うだ」

「ヘッ、少し足りない野郎でも、間に合いますか、親分」

八五郎は甚(はなは)だ穏かでない顎(あご)を突き出します。

「まア、不足を言うなよ。足りない様な顔をして、相手に油断をさせるのは、孔明楠(こうめいくすのき)以来の兵法だ」

「ありがたい仕合せで」
「そう願えれば、有難いことですが――さいわい庚申塚には、私の別懇にして居る家もございます。八五郎親分のお宿をさせて、精いっぱいの御馳走をさせることにいたしましょう」
「そいつは有難いね爺さん、思ったよりお前さんは話せるね」
「皆さんがそう仰しゃいますで、ヘッヘッ」
染井の百姓仁兵衛は、八五郎といっしょに出て行きました。これが世にも不思議な事件の緒口になろうとは、もとより平次も八五郎も知る由はありません。

二

それから四日目、十一月の十三日のことでした。
「あ、驚いた。親分の前だが、巣鴨から神田迄駆けて来ると、ずいぶん腹が減るぜ」
八五郎が寒天に大汗を掻いて飛込んだのです。
「何が始まったんだ」
平次は日向のとぐろを解きました。
「殺しですよ。赤塚三右衛門の伜が殺されたんで――あ、あ、腹が減った」
「呆れた野郎だ、合の手が多くて話の筋が通りゃしない、――お静、冷飯の残ったのがあるだろう。お菜の苦労なんか要るものか、沢庵と目差しでたくさんだとも、――さア話せ、赤塚の伜がどうしたんだ」
「今話しますよ。食うのとしゃべるのとは一緒には出来ませんよ、

生憎口は一つだ」
「不自由な野郎じゃないか。鼻で食いながら口で話すんだ」
「無理だね、親分」
食い続けながらも八五郎は報告しました。
昨夜赤塚三右衛門の伜数馬が、月に浮かれたか、フラフラと庭に出たところを、何者とも知れぬ曲者に、背後から一と突きに突き殺されたというのです。
「それをお前は見たのか」
「見付けたのは今朝だ。そのまま家中の者の口を塞(ふさ)ぎ、急病で死んだことにして、葬式の支度をしたのを、下女のお吉というのから聴いて、土地の御用聞大塚の友吉を走らせ、変死の疑いがあるから、検屍前は葬(とむら)いを受け付けないようにと、檀那寺(だんなでら)に言い含め、あっしは朝飯も食わずにここまで飛んで来ましたよ。ともかく行って見て下さい、親分。よっほど臭いことがありそうですよ」
八五郎の報告は箸(はし)を動かしながら一と通り済みました。
「朝飯を食わずに駈け付けたのをたいそう恩に着せるじゃないか、――ところで、旗本や大名とは違うにしても、公方様格別の御会釈という赤塚家だ。十手捕縄を振り廻して乗込むわけにも行くまい。お前は一と足先へ行ってくれ。俺は八丁堀へ廻って、笹野の旦那のお供でもして行こう」
「それなら宜い塩梅で、笹野の旦那（与力筆頭笹野新三郎）は明日の御成(おなり)の御検分で、伝通院に御出役になって居ります。先刻途中でお目にかかって申上げると、直ぐ平次をつれて来るように、ここの検分はすぐ済むだろうからというお言葉で――」
「そいつは有難い」

平次はさっそく支度にかかりました。

伝通院で笹野新三郎に逢い、三人道を急いで巣鴨庚申塚に着いたのは、昼少し過ぎでした。

赤塚家は伜数馬の変死を、さすがに隠しきれなかったものか、何んとなく物々しいたたずまいですが、それでも苗字帯刀の豪士の威勢に押されて、土地の御用聞大塚の友吉も、無理に掻き廻しもならず、持て余し気味に見張っております。

与力筆頭笹野新三郎が出役となれば、多寡が豪士の見識も文句もありません。

「拙者は与力笹野新三郎」

「それはそれは御苦労に存じます。主人三右衛門は老病にて臥っておりますので、久賀弥門代って御挨拶をいたします」

頑固一徹らしい用人の五十男は、真四角にそれを迎えました。

土塀を繞らした厳重な構えで、小さい大名の下屋敷ほどありますが、扶持も禄米もない赤塚家は、大地主として暮しを立てているので、家の造りも調度も、何んとなく百姓家らしい感じがあります。

「ところで、御子息数馬殿不慮の御災難を被られたと承わったが、御遺骸は？」

「この方にお出でを願いたい」

案内したのは二た間三間を隔てた奥でした。無言で唐紙を開けて、無言で指した一と間は、思いきや至って粗末な六畳で、型の如く廻した逆さ屏風の中に、まだ入棺しない死骸が横たえてあります。

「あれは？」

笹野新三郎以下三人の姿を見ると、屏風の中からハッと驚いたように立上がって、アタフタと廊下に消えたのは、今まで泣いていたらしい、眼の覚めるような娘。それは十八九にもなるでしょうか、身のこなしの軽捷な、嘆きのうちにも愛嬌と明るさを失わない、世にも可愛らしい処女でした。粗末な木綿物の袷も、少し山の入った帯も、この娘の身につけることによって、高貴な上品さを持つと言った、それは不思議な魅力の持主です。

「当家の掛り人、駒と申します」

久賀弥門はむずかしく答えました。

笹野新三郎の眼の合図で、銭形平次は死骸の側に進みました。片手拝みに黙祷をささげて、胸へかけた薄いものを剥ぐと、傷は背中——左の肩胛骨の下から一と突き、心の臓をえぐった様子ですから、まさに一とたまりもなかったでしょう。

「刃先に乱れも狂いもありません。曲者は武芸の心得相当と見えます」

平次は独り言のように言いました。

「左様か」

と新三郎。

殺された数馬というのは、十九というにしては少し老けておりますが、細面の鼻の高い、眉の秀でた美男で、月代の跡の青々としたのも、頬の豊かなのも何んとなく痛々しい感じです。

「左の頬の黒子——これは刺青ではないか」

銭形平次の言葉は並居る人を驚かしました。若様数馬の左の頬には目に立つほどの黒子がある——と百姓仁兵衛からも聞きましたが、死体の頬の黒子というのは、側へ寄って見ると、これは紛

れない刺青(いれずみ)です。眼尻から少し下がった左の高頬、それは豆粒ほどの大きさですが、場所だけによく目につきます。

「そんな事はございません。若様はその黒子を大変気になすって、針で掘って取ろうとなすったようですから、その跡が刺青のように見えるのでございましょう」

久賀弥門の説明に、平次は大して耳を傾(かたむ)ける様子もなく、

「若様は武芸などをおやりかな」

「いえ、生れ付き御病身で、武芸のお励(はげ)みはなさいません」

「それでは百姓の仕事などは」

「とんでもないことで」

「それにしては手が荒れて居るようだが――」

平次は死骸の指などを念入りに見ておりました。

三

久賀弥門の案内で、三人は数馬が殺されたあたりを見るために、庭へ出て見ました。

「戸締りはどうなって居るだろう」

「厳重でございます、――実は当赤塚家には、先代から怨(うらみ)を結んだ敵がありますので、戸締りだけは厳重の上にも厳重を極め、ことに若様は、日中もお一人では外へ出ないようにいたしておりました」

「その敵というのは？」

笹野新三郎は聴耳を立てました。いや、用人久賀弥門の調子には、この反問(はんもん)を待ち構えたような、妙な含(ふく)みがあったのです。

「何も彼も申上げた方が宜しいと存じます――、実は当主赤塚三右衛門には、三十年前家督を争った相手がございます。当主三右衛門は幸い赤塚家先代の鑑識（めがね）に叶（かな）って当家の婿養子となり、赤塚家を継いで三人の子をもうけましたが、赤塚家の家督を争った相手は、それを根に持って、事毎に当家に仇をし、三十年に亘（わた）って争い続けて参りました」

「――」

笹野新三郎も、銭形平次も黙ってしまいました。三十年前、赤塚の娘と、その身上（しんしょう）を争った恋と欲との怨みが、まだ続いて居るということは、常人にはちょっと想像もつかない事です。

「赤塚家の三人のお子様、十次郎様、織江様は、今から三年前、半歳のうちに亡くなりました。十次郎様は水死、織江（おりえ）様は中毒、どちらも疑わしい死に様でございました」

「――」

「後に残った、たった一人の御跡取の数馬様にも、いろいろの災難がつづきました、――例えば理由もなく往来で喧嘩をふっかけられたり、材木屋の路地を通るとき、いきなり頭の上へ材木が崩れて来たり、朝の御食事に、石見（いわみ）銀山鼠取りが入っていたり――」

「その怨みの相手というのは？」

すかさず笹野新三郎が突っ込みました。

「申上げても一向に差支ないと存じます。――当家の主人三右衛門様の従弟（いとこ）に当られる山浦甚六郎様」

「それは何処に居られる」

「小石川駕篭町に浪宅を構えていると承わっております」

「あとで調べるがよい」

新三郎は平次を顧(かえり)みます。話のうちに、広い庭を横ぎって、四人は深い植込みの前に立ちました。

「この辺でございました」

久賀弥門の指さしたあたり、末枯れた草が血を浴びて、紫色に光って居る外はほとんど何んの変りもありません。

「数馬様もときどきは夜分独りで外へ出られたんでしょうね」

平次は誰へともなく訊きました。

「とんでもない。昼さえ滅多(めった)に外へ出られないように、厳重に申上げております」

「すると誰か誘(さそ)い出しでもしたのかな」

「今夜の月は格別だ、少し寒いが――などと、宵のうちに弥太郎は申しておりましたが」

「弥太郎、――それは？」

「私の伜でございます。ちょうど其処へ参りました」

久賀弥門の引合せたのは、二十二三の逞(たく)ましい青年でした。これは殺された若様の数馬とは反対に、男っ振よりは腕っ節に物を言わせる方で、醜(みにく)い顔や、弾力的な長身に、何んとなく人を人臭いとも思わぬところがあります。

「父上、塀(へい)の崩れを見付けましたが」

弥太郎は植込みの奥の方を指さしながら、実は笹野新三郎や銭形平次に注意するように斯う言うのでした。

「それは有難い。曲者の忍び込んだ場所がわかれば、また考えようもあろう」

弥太郎に案内されて、深い植込みの中へ入ると、その辺は古い落葉が腐(くさ)ったままで、さすがに植木屋の手も届かなかったものか、

曲者の足跡などを見付けるたよりもありません。
「この通り」
指さしたあたり、成程土塀の上に置いた瓦(かわら)は十数枚落ちて、腐葉土の上に滅茶滅茶に割れております。
「八、お前の肩を貸せ」
「何をやるんで？」
「塀の外を見たい」
八五郎は物馴れた調子で土塀にピタリと添(そ)って立つと、平次はその帯の結び目を踏んで、八五郎の肩の上に立ちました。胸から上は塀の上へ出て、外は一と眼で判ります。
「足跡でもあるんですか、親分」
「いや、草が深いから足跡は見えないが、俺は瓦の落ち具合を見たかったんだ。案の定外には二三枚瓦が落ちただけだ、それも草の上へ落ちているから、一枚も割れていないよ」
平次はそんな事を言いながら、身軽に八五郎の肩から飛降ります。
「外に変ったことは？」
笹野新三郎が訊ねます。
「この辺に刃物があるような気がしてなりません。八、来ないか」
「ヘエ」
平次は笹野新三郎と大塚の友吉を庭に残して、八五郎と二人、ざっと土塀の内側を一と廻りしました。
「こんなことで刃物が見付かるでしょうか、――それに曲者は武芸のできる奴なら、刃物なんかを捨てて逃げる筈はないじゃありませんか」

深い葉や木立や草叢を分けるのが面倒臭くなったか、八五郎は少しブウブウ言います。

「いや、曲者は刃物をこの辺に捨てた筈だ――捨てるとなれば、大方見当のあるものだ。誰にも思い付かれない、途方もないところに捨てたつもりでも、人間の考えには大方筋道がある。途方もないところほど見付け易いわけだ」

平次は門の外へ出ると、今度は土塀に添って、草叢や畑をグルリと一と廻りします。

一度崩れた箇所の反対側へ出た時、

「八、その溝を見てくれ、多分その辺だろう」

平次の指さしたのは、塀の内から大きな榎の枝が差出たあたり、塀から二間ばかり離れて流れて居る、三尺ほどの溝川でした。溝と言っても潅漑用の小流れで、底に目高の遊ぶのも数えられるほどに澄んで居ります。

「こいつは驚いた、天眼通ですね、――ありましたよ、親分」

八五郎は葉に隠れた溝の中から、手頃の脇差を見付けて、雫をきって差上げました。

「抜いて見ろ」

「紐で鞘を縛って居ますよ。おや、おや、中身は大変な脂だ」

「人を斬った刃物だ、どれ」

平次はその脇差を受取ると、何やら八五郎に囁きます。

「染井へ行くんですか。え、一刻もありゃ眼をつぶっても行って来ますよ」

「じゃ頼むぜ、俺はその間に駕籠町へ行って来る」

「合点」

八五郎の気の軽さ、そこから畑の中の径を一散に飛びます。

四

「この脇差を御存じで？」

平次が持って来た濡れた一と腰、用人久賀弥門は一と眼見ると、サッと顔色を変えました。

「それは」

「誰の物でしょう、御用人」

「確かに見覚えがある。当家を怨む、山浦甚六郎様の差料に相違御座らぬ」

「間違いはありませんでしょうね」

「間違いはない」

久賀弥門の言葉には自信が充ちております。

「私はちょっと駕篭町まで行って参りますが、旦那は庚申塚の番所でお待ち下さいませんか、友吉に案内させますが」

「宜かろう」

平次の指図に従って、もう少しこの事件の経過を見る気でしょう。笹野新三郎は大塚の友吉といっしょに出かけました。

それと別れて平次は、駕篭町に山浦甚六郎の浪宅を訪ねましたが、これは簡単にわかりました。

「拙者は山浦甚六郎だ。何んの用事か」

無精髭の生えた中老人が、貧乏臭い破れ障子の蔭から顔を出したときは、銭形平次も驚きました。庚申塚の赤塚家の豪勢な暮しに比べると、あまりにもひどい違いようです。

「ゆうべ赤塚様の若様数馬様が殺されましたが、御存じですか」
平次の調子は率直でした。
「聴いたよ。たった独りの子を気の毒だな」
山浦甚六郎は憮然としているのです。
「旦那はたいそう赤塚様を怨んで居なすったそうですが」
「怨んでいるよ、赤塚の家督や身上は何うでも宜いが、あの三右衛門という男は、俺の許婚を横取りした奴だ――尤も怨は父親の三右衛門にあるが、小伜などを怨んでいたわけではない。赤塚では二人の伜の変死したのを、この山浦甚六郎のせいにして居るそうだが、飛んでもない事だ。それは疑心暗鬼というものだ――自分の罪に責められる愚人の悩みだ」
「もう一つ伺いますが、旦那は昨夜、何処にいらっしゃいました」
「ハッハッハッ、町方御用聞の其方には気の毒だが、俺は数馬殺しの下手人ではないよ。昨夜は番町の旧友――今は出世して神尾摂津守となっている神尾十三郎殿の許へ参って、碁を打って泊り込んで、今朝ここへ戻ったよ。神尾摂津守は御槍奉行だ、拙者が泊り込んで、夜っぴて碁を打っていたことは、多勢の家来共が皆知って居る。行って訊いて見るが宜い」
「恐れ入りました。ではもう一つ、この脇差に御見覚えはあるでしょうか」
「どれどれ」
山浦甚六郎は濡れた脇差を受取って、打ちかえし打ちかえし眺めておりましたが、
「ある。これは赤塚家に伝わった、対の脇差の一本だ。拙者のでなければ、従弟の赤塚三右衛門のものだ」

「？」

「拙者のはこの通り此処にある。中身は無銘の相州物、目貫は赤銅と金で牡丹、柄糸は少し汚れたがそっくり其侭だろう」

山浦甚六郎は、側にあった自分の脇差を取って平次に見せるのでした。濡れたのと濡れないのとの違いはありますが、それは中身も拵えも、そっくりそのままの脇差、甚六郎の言葉には少しの疑いようもありません。

「有難うございました」

「もう帰るのか、家捜しでもしては何うだ。赤塚の三右衛門奴、伜を殺したのは、山浦甚六郎に相違ないとでも言っているだろう。馬鹿な奴だ、ハッハッハッ」

カラカラと笑い飛ばされて、平次は逃げ帰るほかはなかったのです。

番所に帰るとちょうど染井から百姓仁兵衛を連れて八五郎も戻りました。

「サア、いよいよ大詰でございます。爺さんもいっしょに来るが宜い」

平次は先に立って笹野新三郎始め八五郎、友吉、仁兵衛を赤塚家に案内します。

「下手人の当りは付いたのか、平次」

笹野新三郎は少し不安そうでした。

「悉くわかりました。まことに質の悪い曲者でございます」

何やら平次には、腹の立ってたまらない様子が見えるのです。

もういちど赤塚家へ戻ると、百姓仁兵衛がいっしょに来たのを見て、用人久賀弥門、ひどく渋い顔をしました。が、笹野新三郎

が付いているので、それをどうすることもできません。
奥の一と間、もとのままの死骸を置いてあるところへ来ると、
「爺(とっ)さん、お前の伜の御主人だ。死骸にお目にかかって、念仏の一つも上げてくれ」
「ヘエ」
平次に言われて、逆(さか)さ屏風の中に膝行(いざり)寄った仁兵衛は、恐る恐る死骸の顔に掛けた白布を取りましたが、
「――」
ハッと息を呑んで、そのまま死骸の顔に見入って居るではありませんか。
「どうした、爺さん」
「伜ッ、――文三ッ。これ、どうしたのだ。誰がお前をこんな事にしたのだ」
仁兵衛はいきなり死骸の首を抱き上げると半狂乱の態(てい)でわめき立てるのです。
「よっく見ろ、それは本当にお前の伜か、似ていてもそうでないかも知れないぞ」
平次は、側から乗出します。仁兵衛の表情心持の動き、四方(あたり)の空気まで、毛程も見落さじとする様子です。
「――自分の伜を見違えて宜いものか、これは私の伜の文三に間違いもないだ。――頬に刺青(いれずみ)か何んかあるが、右の耳朶(みみたぶ)に凍傷(しもやけ)の跡があって、左の手の小指が子供の時の怪我で曲って居ますだ。誰が何んと言っても、伜の文三に間違いはありましねえ」
仁兵衛は若者の死骸を抱きながら、掻き口説(くど)くのです。
「御用人、これはどうした事だ」

平次は後ろに小くなっている久賀弥門を顧(かえり)みました。

「――」

「いくら家や主人が大事でも、顔形ちの似た他所(よそ)の伜を騙(だま)してつれ込み、骸(なきがら)に黒子(ほくろ)の代りに刺青までして、身代りにするのはひど過ぎはしないか」

「――」

「侍も百姓も、子の可愛さに変りはないぜ。赤塚だか黒塚だか知らないが、こんな家の一つや二つ叩き潰しゃどうなるてんだ。自分たちの顎(あご)が可愛さに、人の伜を殺して済むかよ、御用人」

平次は何時にない威猛高だったのです。

「平次それはまず宜いとして、下手人は誰だ」

笹野新三郎は聴き兼ねて注意しました。

「身代りの若様――文三を外へ誘(さそ)い出せる奴――ひと太刀で間違もなく文三を殺せる奴――曲者の逃げ道らしく、土塀の瓦を内から落した奴――本当に曲者が土塀を越えて忍び込んだのなら、瓦は半分以上外へ落ちなきゃなりません。それに内側へ落ちた瓦のこわれようもひど過ぎますよ。柔かい土の上へ落ちた瓦が、あんなに粉微塵(こなみじん)になるものですか」

「――」

「まだありますよ。血染の脇差の始末に困って榎(えのき)の枝の上から、塀外の溝(どぶ)に投げ込んだ奴」

「それは誰だ」

「山浦甚六郎とかいう浪人者は何んにも知りゃしません。あれは若いときこの家の主人と女の事で怨みを結んだか知れませんが、三十年経ってから、相手の伜を三人も殺すような悪党じゃありま

せん、――皆んなそう思ったのは此方のひがみからで」

「では誰だ」

「その娘に訊いて下さい、――お駒とか言いました。その娘が文三を殺は先刻（さっき）、文三の死骸の側で泣いておりました。その娘さんした下手人を知っている筈です。お駒さんと文三と懇（ねんご）ろになるのを我慢のできなかった人間が一人あった筈です。――腕の立つ若い男、――主人の居間から、あの脇差を持出せる奴。土塀の崩れに内側から細工をした奴――あッ、八。逃すなッ」

娘お駒の視線に追われて、パッと逃出した男は、八五郎の糞力（くそぢから）に無手（むず）と組付かれました。

「あッ伜」

それは用人久賀弥門の伜、弥太郎の追い詰められた狐のような顔だったのです。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年十一月号　文藝春秋新社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部